

一

問一

古典は過去の時代固有の本領を持つだけでなく、各時代の文学において失われたがゆえに必要とされる何かを、文学を更新するための規範性として潜在させているということ。

(七十九字)

問二

異民族の侵略もなく同質性を保ってきた日本が、自国の古代文学と強い因縁を結んでいることは、古典的古代文明を有する大国の周辺国にあつては、稀有だと考えられるから。

(七十九字)

問三

文学のジャンルは各時代の社会変化と連動するだけでなく、それ自体が固有の機能や価値を有しているのに、そのことを等閑視し個々のジャンルを無分別に混淆してしまうこと。

(八十字)

問四

過去に属するものとしてあるだけでなく、それが喚起する規範性によって後の時代の現実にも関わってくる古典を、歴史における不断の変遷や複雑に入り組んだ人間活動との関わりにおいてとらえようとする文学史は、古代文学の作品を、異なる機能を持つジャンル間の移り変わりやそれらの関係性に着目して、集合的に理解しようとするということ。

(百五十八字)

問五

- (a) 次第
- (b) 時勢
- (c) 憧憬
- (d) 便乗
- (e) 消息

問二
ハ

問二
(a) られ (b) らる (c) らるれ (d) らるる

問三

① 鳥羽天皇がいらっしやって

② もし堀河天皇がご覧になったら、どんなにか賞美なさっただろうに

③ 私が自分の部屋にさがっていたところに

④ 鳥羽天皇に気づかせ申しあげまいと思って、私は何でもない様子にふるまいながら

問四

作者が、鳥羽天皇に声をかけられて、自分を大切にしてくれた堀河天皇の思い出から現実を引き戻された状態。(五〇字)

問五

堀河天皇の思い出に涙ぐんだことをごまかす作者の心情を察して、堀河天皇の名をぼかして示した鳥羽天皇の配慮を、子供らしくてやさしいと感じたから。(七〇字)

問三

- 問一
- ① かくのごとくなるを
 - ② かつて
 - ③ あにうべけんや。

問二

(ア) 亡国の臣下も自分の力だけで自分の家の安全を保つことはできない。

(イ) 臣下は結局煬帝に煬帝自身の過失が耳に入らないようにさせ、

(ウ) 人民に不利益なことがあれば、必ず言葉を尽くして私の過ちを諫めなければならない。

問三

隋の煬帝が暴虐なために、それを恐れた臣下たちが口を閉ざして諫めなかった結果、君臣ともに滅びてしまったこと。

問四

臣下が太宗を恐れ憚ることなく、太宗の気付かない政治の誤りを諫めることができるようにしむけるため。(四十八字)